

にされて調べられると聞きましたが無事でした。博多が近づくとき皆甲板に出て日本の島をみて泣いていました、祖国は有り難いものです。上陸すると係官が「あなた方は、あちらでどうしていましたか、あなた方のようによい服装で帰った人ははじめてです。皆麻袋をこしにまいて帰りました」と教えられました。奉天（瀋陽）はゲベウのお蔭で治安がよかったからと思いました。

中共と八路が内線したときは、血ぬられた兵士の衣やホータイの洗濯を、強制的にご奉仕で洗濯を命じられました。鶏を徹発にこられたときも、子供が病気にしていたのであわれんで持っていきませんでした。引揚後は親達の経営していた農業を見習い豊かな心で楽しく働きたいと思ひ農業を一心にいたしました。が国策に添って渡満した人々の最後のいたましさは頭から離れず山野に屍をさらした人達にはふりそそぐ日光、赤い夕陽、山の鳥、狼の群の外には誰が訪れ一輪の花を供え、一本の線香をあげて下さったことでしょうか。

皆、非戦闘員でありましたのに戦にまきこまれ八万もの方が無念の死をとげました。

引揚げ当時の思い出

北海道 清水 久子

昭和十二、三年頃役場や小学校で、満蒙開拓の話で大分聞かされ、またポスター等も見かけました。

私は兄達四人が軍籍があり色々な話を聞いて育ったためか、女でも何かお国のためになることがないものかと考えておりました。

ちょうどその頃満州から嫁さんを迎えにこられた方がおり、他にも何人かの嫁さんを探している話を聞きましたので、反対する親兄弟を説き伏せて満州に行くことになりました。

十三年の四月嫁さんを迎えに来た方に同行して頂き、私その他二人の方と敦賀港から日本海を渡り朝鮮の羅津に上陸しました。

大きな汽車にゆられて林口、牡丹江を通り黒台の駅に着きました。主人になる方や大勢迎えに来て下さり、私

共はトラックで第五次信濃村開拓団に着きました。翌日結婚式を神社の前で上げていただきました。

長野県での村名が各々付けられており、生れ故郷の村と同じ北佐久班に到着しました。

開拓も大分進み、始めは共同経営でしたが、個人経営になり、各戸とも二、三人の子供も出来ました。

また近所の満州人とも仲良くなって、毎日が楽しい日々でございました。

海軍に籍のある主人は昭和十六年九月に召集令状を受け出征して行きました。

子供は三歳の子一人でしたが寂しい二人暮らしが長く続きましたが、大東亜戦争が始まってからは近所の方々も次々召集されて行きました。

忘れもない八月八日の夜、私共から三里ぐらい遠方に臨む満ノ国境の鏡山谿山の頂上あたりで赤や青の照明弾らしいものが上がりました。もしや戦争にでもなるのではとても心配でした。

今頭上に飛んでいる飛行機はソ連機だから用心するようにとのことでした。次の日にまた連絡があって、満州

軍の反乱を恐れ一時山の中へ避難せよとのことで、大急ぎで準備して馬車で出掛けました。何時しか長い行列になりました。

暫く行くとソ連機が飛来して私共の頭上をかすめて機銃掃射です。ちょうど軍の方々も一緒でしたので尚更攻撃されたでしょう。

一機が去ればまた一機と次々来ますので最初の日から犠牲者が大分出ました。戦争の恐ろしさをまざまざと目前にし、夜ともなれば東安の辺の空から真っ赤に燃えてまた弾薬庫の爆発の音、戦場さながらでした。

私共開拓団や他の方々の方々の行列もいつしかばらばらになり、適道のあたりでしたが、引率者が今晩はここで泊まるようにとのこと、大急ぎで夕食の準備を始めたところ、まわりを匪賊に囲まれているから直ぐ静かに出発せよとのこと、暗い中をお互いに手を取合って進む中、匪賊からの銃の攻撃でびゅんびゅんとかすめる銃弾の中を夢中で走り去りました。また何人も死人が転がっています。暗いために誰の死体か一回に分かりませんでした。

途中で日本の兵隊さんの亡きがらや軍馬の横たわつてゐるのときに見かけました。

その頃から私は隣組の九人がいざというときのために兵隊さんに頂いた手榴弾をかかえ持っており、子供達にもいつでも死ぬことを言い聞かせておりました。

私共一行は女子供ばかりですので、引率者が無理とおっしゃり、ソ連兵の前に白旗を上げて出ました。二十五日頃だったと思います。

今度はソ連兵に引率され、そのときに日本は負けたと聞かされ信じられませんでした。

梅林という所に連れて行かれ難民生活が始まりました。そこで信濃村の方に逢つて匪賊に追われ、行きづまって何十人かで川に飛び込み自決したこと、またソ連兵が前に出て大急ぎで山に逃げ込みそこでも何十人かが自決したことを知らされ、私共も今日か明日かと死を覚悟したことが幾度もあったのです。

北満の寒さち耐えられずハルビン新京と南下させられました。食糧も十分でないために栄養失調で子供はばたばた倒れ、其の上伝染病が出て、次々死亡し、同輩を

目前にしてどうすることも出来ませんでした。

いよいよ奉天まで南下して、私共開拓団は食べるために鼠をしながら引揚げを待ちました暫くして内地へ帰れる話が出て早速申込みました。コロ島から船で帰ること、またコロ島までの長い旅が始まり、汽車にもちょっとは乗せてくれましたが、大体は歩いて長い行列で何日か過ぎてコロ島に着きました。

漸く船に乗ることが出来て、なつかしい大陸を苦しみと悲しみとで過ごした日々を偲びながら別れを告げました。船中では皆日本へ帰れる嬉しさで多少体の弱っている方も明るい顔となり、子供達もはしゃいでいます。何日かの船旅で漸く内地の陸地が見えたときはあまりの嬉しさにただ涙々でした。

博多に上陸して関門トンネルを通り大阪駅に下車したとき、千円頂き大喜びでした。

六月二日に小諸に到着したとき知人から主人が三月に復員していることを聞かされ、とても嬉しかったことを覚えております。満州の開拓が忘れられずまた北海道の開拓に二十二年に参りました。千歳に入植し、現在は患

庭で恵まれた生活をしております。内外ともに厳しい今日ですが、日本の今日の平和がいつまでも続くことを願ってペンを置きます。

二兎失い、四十日間の逃避行

岩手県 高瀬 三郎

昭和九年、茨城県立太子農学校卒業。当時の満州開拓への国策に順じて大陸での農業に従事したい気持ちから、文部省立の盛岡高等農林農学部所属の第一拓殖訓練所に入所。翌十二年二月、修了と共に密山県第五次永安屯開拓団に入植。以来九年、開拓に専念。入植三年後、私は妻を迎え、一女一男を得て、十ヘクタールの農地に雑穀、野菜を中心に経営も向上、更に畜産、養豚、緬羊、蜂蜜を加え、充実した経営にはいつていた時期でもあった。

経営は順調に発展、地域中国人との交流も仲良く、満州国発展への大きな貢献をはたし得る状況のながて、二

十年八月九日未明、ソ連機によって永安駅付近が爆撃を受け、満州国侵攻が始まり、ただちに部落長会議が召集され、日ソ戦闘状態にはいったので、数日間の食糧と身のまわりの品を持って、全員山地に近い岩手部落に集結。奥山に避難することに決定。翌十日午後集結。その間ソ連の空爆がたえまなく行われ、その後の行動についてはリーダーの軟弱さもあって、意見がまとまらず、けっきょく各部落ごとの自由行動をとる結果となった。

こうした状況のなかで、ついに二個集団が部落にもどり、自決を選び、われわれが去ったあとの情報によると自決したことが知らされた。

このような状況のなかで、降りしきる雨のなかの行動、そして目的地を目ざして行く途中では、坂田密山県長がソ連の機銃掃射でわれわれの目の前で即死され、われわれは難をのがれ、山中の避難を中心に行動する。途中で食糧は思うようにならず、取り残されたトウキビ、馬鈴薯、南瓜、など、更にブドウの葉等に助けられながら、現地を出て数十日、爆撃、夜を徹しての行動。出発地点の同志とはバラバラに離れ、家族を守るのが精